

先月、今月で川西町の地域おこし協力隊を卒業された方々、お疲れ様でした。みなさんの活躍は、きっと人の役に立って、町のためになってます。

僕は協力隊を終えてから数年経ちますが、任期後も山形暮らしをしていてよかったと思いますし、ここまで生活できたことを、自分の成長だと思えます。どこに暮らしても人間関係が一番ネックになりますが、協力隊のように、自分の暮らしを重視する活動、つまりはライフスタイルを築く活動は、自分自身を強くします。それと同時に協調性も学ぶ場だと思えました。この経験により、より自由な生活が出来る自信につながりました。お金がなくても、仕事がなくとも、結婚できる。やれば何とかなる (by 小方さん) 僕はこういう格言に乗っかるのが好きです。自分の事だから自分次第！なんて明確なことか！

休日の夕方に、テレビを観ながら原稿を書いていると、ついつい、筆が進まなくなってしまった。ドキュメンタリー番組「消える結婚～男と女の行方は～ 特別編」が面白すぎたのです。

よくテレビで、「価値観が違うから離婚しました」という芸能人がいると、「他人同士なんだから価値観なんて合わなくて当然」というコメンテーターがいるように、世の中、当たり前すぎてつまらないと、どこか俯瞰して物事を見る自分が存在しつつ、自分だったらどうなるだろうと？どこか介入したくなることもあります。人間というのは、人付き合いというのは？不思議なものだ。そのあたりの感情が原稿を遅らせました。

つくづく思います。「中学生になる頃、その人のパーソナリティは確立されて、それが、その人の今後の人生を形成していく」。自分に置き換えても、生活するうえで、何がよくて何が嫌なのか？考え方ひとつ、ティーンエイジャーの頃と根本的には変わっていないと思います。

番組中も「自分が。。自分が。。。」「わかってくれない。。」というキーワードがたくさん出てきます。要は、結婚するほどの人生のパートナーには、自分のことをわかってほしいという願望が誰にもあり、他人と違うプライオリティを持ちたい、それが価値というわけです。しかし、男の目線で言わせてもらおうと、この番組に出てくる女性は、みな結婚したくない人だということです。ならば、結婚なんかしなければいいのに、一人でいるのは嫌いなようです。専業主婦の肝っ玉母ちゃんからは非難の嵐になるような女性ばかりです。

男女平等、女性の社会進出が当たり前の現代社会、女性一人でも生きていくことはできます。でもそれは、個人的に生きていくということで、家庭を築いて生きていく事とは別問題です。この番組を観てわかったことは、こんなわかりあえない人同士でも、この人にしてこの人というように巡り合わせに間違いはないということです。

番組出演者の例をあげましょう。40代半ばのキャリアウーマンの女性は事実婚を選びました。事実婚とは法的には入籍していません。事実婚を選んだ理由は「名字を変えたら免許などの変更手続きが面倒なこと、転職活動中でキャリアに影響があるかもしれないから、結婚して女は養われると、立場が上から見られている気がして我慢ならない」だそうです。本来、美德とされている結婚観、夫婦二人で家庭を築いて、収入を得て、協力しようという価値観とは逸脱した考えです。さらに、この夫婦？は法的には夫婦でないから、二人で契約書まで交わしていて、生活にかかわること色々契約があります。男もそれでいいのだからお似合いだなあと思いました。

もう一つ、20代のミュージシャンを目指す女性は、34歳の優しすぎるサラリーマン彼氏に不満を抱いています。何をしても許してくれる、物足らなさ。。これは男から別れてしまえばいいのに、好きで別れられないらしい。男も結婚はしなくてもいいし、子供もほしくないと言ひ、女も結婚という制度で縛らないでほしい、結婚を持ちかけることは器が小さいという意見の持ち主です。お似合いです。こうならば、結婚なんて気にせず好き勝手していればいいのに、なぜ結婚を意識するのか？逆に世間の風習に従順すぎて笑ってしまいます。

さて、こういう番組を観ると、だれでも「あーでもない、こーでもない」と意見したくなります。番組として、それでこそドキュメンタリーなのですが、僕はこの番組を観て10分後には、気にならなくなりました (笑)

失礼な言い方かもしれませんが、僕にとっては、どうでもいいことだったのです。まず、気が合わないし、相手にしないし、話にならないし、出会わないし。。。と、なぜあの男たちは、あの人が好きなのかと？逆に男たちに疑問を抱きました。世の中、探せば色々な人がいるのに、なぜその人なんだ！と。

まあ、誰でも結婚した時はよかれと思ひ、結婚するわけですから、トラブルの一つや二つ、いくらでもあると思います。青年期のパーソナリティー確立論からすれば、結婚しても性格は変わらないとしても、協調性を身につけることは、社会で生きていくうえで必要なスキルだと思います。ここで言う協調性とは「自分」を他に押し付けない程度のことを指します。要は、自分の思い通りにならなくて当然ということです。

僕が言える立場ではないですが、ここだけの話（ネットに出てますが。）、嘲笑してしまう人たちがいます。それは、「結婚はしたくないけど子供はほしい」という人たちです。根本的に何か間違っているし、苦勞したことないんだろうなと思います。資本主義社会の犠牲者でしょうか？メリットや効率ばかり、つまりはコスパを追求するけど、結婚も子供も、ゲームでも玩具でもペットでも仕事でもないんだぞ！と。まあ、当人には伝わらないでしょうが。

とても初歩的な人間心理ですが、自分の意見が通る、通らない、立場が上下するというのを、小学生くらいで経験しておくべきでしょう。何でもハキハキ言うリーダー格の人が、小学1年から6年まで通るわけでもなく、時には立場が逆転していじめられたりするの、世の中、そうはいかないぞ！という社会の縮図です。会社はこれでいいかもしれない、親戚でも夫婦でもないから。ある程度の距離感で、仕事をすればいい。集団で目標に向かえばいい。何かを成し遂げればいい。でも、家庭は違います。社長が家庭の社長ではない。偉いわけでも、立場が上なわけでも、優れているわけでもない。自分で、ふたりで築いてきた関係性で形成されます。夫婦であることに、そこに社会的なメリットがなくても、お金がもらえなくても、家庭であり続けるわけです。「結婚はしたくないけど子供はほしい」という意見は、やっぱり陳腐です。

かつて、スティーヴィー・レイ・ヴォーンというアメリカ人のブルースギタリストがいました。ポピュラーではないけれど、誰もが認める実力のミュージシャンでした。その人のドキュメンタリーを観たら、苦勞を乗り越えて、最後まで一貫した姿勢でブルースを弾いていたとわかりました。僕はてっきり、あれだけ凄腕なギタリストなのだから、すぐ話題になったのだと思いきや、そうではなかったのです。現実には、黒人音楽であるブルースを白人が演奏することが受け入れられず、30歳にして、ようやくデビューしたことがわかりました。現在は、ブルースは誰が演奏しても違和感がない世の中ですが、でも、どこかでブルースは黒人のソウルを歌った音楽という概念があります。けれども、スティーヴィー・レイ・ヴォーンの功績により、歴史や伝統だけではなく、その人ならではのブルースがあると証明しています。結婚も人間関係も、仮に小学生の頃にパーソナリティーが確立したとしても、一貫した信念と実力があれば、おのずと結果はついてくる。共鳴しあう音楽のように、協調性が生まれるのだと思います。